ISSN 0386-4790

国文学研究資料館報

第38号

平成4年3月

国文学論文目録データベースのオンラインサービスについて

データベース室　松村雄二

かねて本資料館報や、国文学論文目録データベース通信などを通じてお知らせしてきた「国文学論文目録データベース」が、平成四年度四月一日より、サービスを開始する運びとなった。

開始に向けてすでに、本データベース利用案内のリーフレット、利用の手引き、利用申請書、ポスターといった関係書類を、全国の大学学部、国文学研究室、図書館ほか、関係諸機関に宛て配付させていただいた。

「国文学論文目録データベース」は、当館が昭和六十二年以来すでに公開している「和古書目録データベース」「マイクロ資料目録データベース」に次いで、三番目にオンラインサービスを開始するもので、これによって、利用者は、当館への一度の申請で、この三つのデータベースが利用できることになる。

本「国文学論文目録データベース」は、棚町知彌教授が研究情報部長であった時期に計画され、山中光一教授、新井栄蔵教授と、引き続きその開発にあたっての試行・実験を繰り返してきたものである。広く大方の利用に供しうると判断されるまでの道のりは長く険しいものがあったが、ようやくここに、十分でない部分を残しつつも、ある程度まとまったデータを登載してのサービス開始という段階に至ったものである。

資料館に着任する前の職場で「国文学論文目録データベース」が資料館で作成されていて、そのうちにオンラインでサービスされると仄聞してから、いったいどれくらいの年月がたったことかと回想される。着任後にその間の事情をいろいろ知ることになったわけだが、データベースがまがりなりにも利用に供しうると判断されるまでには、データの初期入力後の工程で、データ修正やデータベース構築に、データの入力以上の時間と費用と労力・能力が必要であり、しかもその実現のためには、専門的に高度な知識のある国文学研究者による実質的な手当てが新しく要求されるなどの問題が山積していることを改めて指摘しておく必要があると感じた。

さて、そのようにしてできた「国文学論文目録データベース」の概要は、当館が東京大学国語国文学会等の事業の後をうけて毎年発行している『国文学年鑑』（当初『国語・国文学論文目録』等として刊行されていたものから『国文学年鑑』という名称に移行した）の雑誌・紀要・単行本論文目録に依拠し、それをデータベース化したものである。今回四月一日よりサービスを開始するのは、そのうち、現段階でほぼ統一したシステムによって運用が可能な昭和

目次

国文学論文目録データベースのオンラインサービスについて……松村雄二……1
共同研究報告……新藤協三・佐伯眞一・山崎誠・深沢眞二・武井協三・本田康雄……4
新収資料紹介㉝……7
新収和古書抄　平成三年……8
彙報……8
文庫紹介⑯「青森県立図書館」……9
国文学研究資料館　案内図……10
利用者へのお知らせ……11
平成四年度春季学会開催一覧……12

五月から土曜日が

閉　館

となります

11頁末尾の関連記事をご覧下さい

五十八年より平成元年までの七年分、約六万七千件の論文データである。当面は、可能なかぎり、五十八年以前への遡及分（当面二年分ずつ）と平成二年以後毎年『年鑑』から新規作成する一年分のデータを、毎年追加登載していく予定である。

ただし、『国文学年鑑』をご覧いただければおわかりになるとおり、例えば、ジャンルの仕分けが年度により異なったり、データのミス入力が見つかったり、サービス開始の対象とするまでにかなりの手当てを必要としているというのが現状である。さらにいえば、例えば、人（執筆者）の名前にしても、その人の親が名付けたとおりに読まなければ間違いだとなると、誰も検索できない名前があったりするので、少なくとも、通常はこう読む場合が多いという読みでも引けるようにはしなければならない。そういう論文データそのものではない検索用データの手当ても、必要になってくる。これは、『年鑑』に毎年新しく登場する執筆者約二、〇〇〇名弱の処理のみならず、さらに、雑誌名などを考えたりするだけでもお分かりいただけると思う。要は、データを入力してから後に始まる作業が実に膨大なのである。量的に大きいデータベースを対象にすればするほど、等比級数的に拡大する。実感としては、データ入力の終わりが作業の終了なのではなく、データ入力の終わりがデータベース化作業のはじまりだということなのである。

ちなみに、一年間に発表される国文学論文の数（『年鑑』に集録される数）は、昭和五十九年以降はほぼ一万件の前後で推移するようになっている。それ以前は、三十八年以前は三千本台、それ以降四十九年までは四千本と五千本の間で推移し、五十年から五千本台、五十四年から六千本台に移行、五十八年に七千本台に達したあと、翌五十九年以降から右記のように、毎年一万本弱であったり強であったりして今日に及んでいる。したがって、将来に昭和十六年以降の論文が本データベースに登載された暁には、二十数万というデータが提供できる見込みではあるが、そこまでになるには、まだまだ大きな山をいくつも越える必要がある。

初期の開発時以来大きな転換点となったのは、『年鑑』の印刷方法が、昭和六十一年から従来の写植印刷の時代からCTS（コンピューター・タイプ・セッティング）へと変ったことであった。これに伴って、『年鑑』自体がフォーマットの仕様を変更し、必然的に国文学論文目録のマスターもそれに対応する変換を余儀なくされるという問題があった。

CTSは、そのままこの「国文学論文目録データベース」の作製に直結するものではなく、それぞれに独自なシステムで運用されるものであるが、一面ではコンピューターを基盤とする約束上に両者が位置したという点で、データベース化が格段に容易になるかのような判断を生んでしまったようであるが、実務を担当する者からみれば、このような判断は誤りであると言わざるを得ない。

また、前述のように年一万件の基本論文データだけでも、三～四メガバイトの容量が必要であり、将来二〇万件以上という論文データ件数に達したとき、これに付随するシソーラス容量にハード・ソフト両面で対応しきれるか否かという新たな問題が発生しつつある。人文系のデータベースに関するデータ量、およびシソーラス容量のこうした知見は、残念ながらまだ民間のシステム開発業者の側でも十分な理解が得られていない現状である。

次に、本データベースの検索項目を具体的に紹介してみたい。

検索項目は、時代・分野・論文タイトル中のキー・執筆者・雑誌名・刊年などからなるが、この中でメインとなる検索項目を敢えてあげれば、二つあると思う。まず、論文執筆者名による検索である。利用頻度の高さから考えれば、もっとも重要と言えるかもしれない。この検索を便利な状態にするために、執筆者シソーラス（データ件数は人名約四万数千件の十倍以上、四十～五十万件）を用意した。次に、主題検索にあたる論文タイトル中のキーによる検索。このキー検索と他のコマンドとをさまざまに組み合わせて検索することによって、利用者は、ただ単純に論文を捜すだけでなく、目当ての論文へ容易に、かつ短時間に接近することが可能になる。ごく簡単な例

を示せば、例えば源氏物語の王権論を調べたいという場合、「源氏物語」というキーを持つ論文集合は、前期七年分のデータの中に約一、二四〇件ある。また「王権」というキーを持つ論文集合は、三二件である。これを別個に画面に表示して一々確かめるには時間がかかるので、最初からこの両者を組み合わせて引けば、二つのキーを合わせ有する論文八件に絞り込んで引くことが可能になる。利用時間によって接続料金がかさむことを考慮に入れると、いかに早く目的の論文に到達するかは、こうしたキー同士の組み合わせや、他のコマンドとの組み合わせ検索の習熟度に左右されるわけである。

本データベースが用意したこのキー検索は、既成のデータベース検索ソフトのそれとは違い、通常にワープロやパソコンを使っているように簡単には実現できない。かりに実現しても、データ量が膨大であるから、ひとつの文字列を捜すために、常識では考えられないほどの時間がかかることになる。これを便利な状態にするためには、ハピネスというシステムプログラムを利用し、VSAMというキー付ファイルの形式にして、初めてできるというのが現状である。また、そのハピネスの処理をするために、キー切り出しのための専門用語辞書が必要であり、この辞書作成作業でも多大な時間と労力が傾けられた。それでも、現時点では甚だ不十分なものである。それを補強していくという方向を、科学研究費補助金総合研究(A)の形で、多くの国文学者にも協力していただいて、研究語彙の調査収集につとめているが、これをデータベース構築に生かすには、相当な努力が必要である。本データベースにおけるこのキー検索は、既成のデータベース中でも、かなり高水準の検索方法を実現したものと評価しうるが、なお多くの問題が残っているというべきであろう。

以上、「国文学論文目録データベース」のオンラインサービス開始に当って、その紹介をかねて一通りの説明をさせていただいた。その他、接続方法に関する利用方法や利用申請、利用料金等の問題は、当館で用意している「利用の手引き」をご覧いただくこととして、ここでは省略した。

最後に当って、今後の課題について簡単にふれさせていただく。一つのデータベースには、さまざまなレベルのプログラムが複雑に組み合わされている。それ自体にも、また、検索システムデータにも、さまざまな改良が必要である。さらには、検索システム上の問題として、検索語彙のカナ付けテーブルの問題、キー切り出しの問題、多種の検索辞書の改良の問題などがある。「国文学論文目録データベース」の場合、先述のように多難な作業を重ね、不十分ながらもとりあえず利用可能なレベルにまで仕上げられたのであるが、右記の他にも今後さらに改良を加えるものとしては、異体字・同義字の漢字種をどう縮約をかけたらより整合性のある漢字出力ができるかといった問題や、シソーラスのデータ量を支えるハード・ソフト面の問題が、残されている。これらの課題については、現在四月一日オンラインサービス開始に向けての検索システムの整備・テストと並行して研究中であるが、実際の利用に供するに足る十分な成果を得るまでには、さらに相当の時日が必要である。この一年間、オンラインサービス開始に向けての試行期間を用意し、各地域の代表校にモニターを依頼したり、いくつかの大学や学会を訪問して、本データベースのご紹介をさせていただいた。その際に、多くの国文学研究者からありがたいご助言やご意見をたくさん頂戴した。この場をかりてあらためて厚く御礼申し上げたい。と同時に、サービス開始後実際に利用されてのご意見やご希望・ご不満など積極的にお寄せ下さるようお願いしたい。データの不備はもとより、さまざまなレベルでのご批判があろうかと思うが、本データベース自体が実はまだまだ揺籃期の実験的モデルにすぎない。本データベースが今後、国文学の世界での多種多様なデータベースのあり方を模索するための一つの試金石となれば幸いである。

――共同研究報告――

平安和歌における修辞の研究

新藤協三

当初の計画は次の如き観点で進められた。平安和歌に見られる掛詞・序詞・枕詞・縁語などの修辞のうち、最も頻用され、かつ主題ともかかわる掛詞に的を絞って、掛詞が表記される場合の仮名遣いによって、二義の主従・軽重関係に逆転現象が生ずることがある点に着目して、勅撰八代集を対象に定め、如上の問題を考察することにした。「足引のやまゐはすともふみ通ふ跡をも見ぬは苦しき物を」（後撰・六三二）を例にすれば、山居（やまゐ）・病（やまひ）のいずれに表現主体の力点があるかによって、「ゐ」「ひ」の表記は異なるであろうとの想定の下に、諸本を博捜し、一方で定家仮名遣い等をも斟酌しつつ、掛詞の二義性を八代集全般に亘って網羅的に考察し、先掲の課題に解答を提供し得ると考えていた。

ところが、平安期の仮名遣いを忠実に継承する八代集伝本が果してどの程度伝存するのか、また、古今から新古今まで三百年の間に、音韻上の変遷（先の例では「ゐ」「ひ」の音価の差異の漸減）が生じている事実に如何に対応し得るのか、との疑問が湧出し、緻密な文献資料批判の学力と、国語学上の高度の音韻知識とが要求されるため、結局この見通しは画餅に帰せざるを得なかった。

そこで、計画を変更、八代集の修辞一覧を最終目標に据え、先ずは三代集に焦点を絞り、具体的に掛詞・序詞・枕詞・縁語を抽出する作業にとりかかったが、既にいくつか試案の出されている古今集が先蹤例ともなり、方法的にはあまり問題はなかった。厳密な意味では修辞の範疇には含まれない比喩、見立て、対句などの表現技巧と、修辞とが密接にかかわり合うこともわかり、修辞を考察する場合、これらの点は不可避であるとの確信も得た。今年度は後撰集のみの作業で終わったが、三代集全てについてこの作業を押し及ぼせば、三代集時代の修辞の具体的な様相について、一とおりの概要を把握し得るであろうし、ひいては、八代集全般にも延びる筈である。

平家物語と語り物文芸性に関する研究

佐伯眞一

平家物語が語り物であることは言うまでもないが、その語り物文芸としての性格がどのようなものであるか、従来の研究は、極めて多岐にわたっている。本研究では、従来の研究史を振り返りながら、今日的観点から新たな「語り」論の基礎を築くため、多角的な検討を行なった。計三回の研究会の発表者・題目は次の通り（発表順）。

村上学　「語り」研究――方法論的に――

志立正知　『平家物語』の表現と視点

千明守　『平家物語』語り系諸本における本文流動と〈語り〉

松尾葦江　平家物語と語りに関する試論――「作品としての成立」にむけて――

横井孝　延慶本平家物語の「草子地」について

佐伯真一　「いくさがたり」論の展望

鈴木孝庸　平曲からみた〈語り〉

「語り」概念そのものの多義性、「語り」と現存本文との関わり、「個別の語り」との関わり、平曲との関連など、話題は予想通り多面的であり、もとより三回の会合で語り尽くせる問題ではないが、現在「語り」について一般に通用している観念の危うさを検証しつつ、議論の共通基盤を築くことができたと思われる。

同時に、国文学研究資料館蔵・平家物語関係マイクロ資料の解題を企画し、研究発表と並行して作業を進めている。資料館には既に相当数の平家物語関係マイクロ資料が収集されているが、平家物語の諸本分類は周知の通り複雑を極めるため、現状では心ずしも利用しやすいものではない。その整理を専門的観点から試みるものであり、基礎的研究がほとんど公開されていない版本類の整理等にも基本的な展望を開くものと思われる。研究成果は、各自の論考とマイクロ資料解題を合わせた形での公刊を企図している。

古代後期に於ける幼学書の受容に関する研究

山崎　誠

本研究は近年諸ジャンルの研究者の関心を集めるように成り始めた幼学書の世界を、具体的な資料について共同討議とテキスト読解作業を行ない、なるべく多角的な視野から解き明かして見ようとして出発した。年二回の共同研究で余り本格的な研究にはならなかったが、今後継続的に行なうものも含めて、研究の方法の概要とその内容は以下の通りであった。

①上代より近世に至る幼学書の全体像を把握すること（各時代の幼学書にはどのようなものがあるか。また、どのようなものを幼学書として認定するか、それらはどの様に享受されたか）及び書誌データの蓄積と未紹介文献の発掘。②その中から重要でありながら、従来殆ど研究のなされない文献を選んで解読作業を行ない、その成果を公表する（「仲文章」の輪読による解読）。③幼学書の機能と享受の実態の解明をメンバー各々の関心から行なう（研究報告に基づく共同討議）。④今後の幼学書研究が目指す方向を、幼学書の文化史的背景や文芸世界との交渉といった具体的問題とからめて探って行く。

本共同研究の成果としては、数年以前より私的な研究会での研究成果を「仲文章注解」（仮称）の形で公刊する見通しができたことがあげられる。また、新たに源為憲の「口遊」を解読しようとする試みが始っている。

近世初期の禅林と堂上の文学的交流の研究

永雄・素然両吟和漢聯句をめぐって

深沢眞二

このテーマについては同じメンバーによって、二年前から私的に研究会が持たれてきた。それは、禅僧英甫永雄と中院通勝（法名素然）が堺の光明院で天正十九年から翌年にかけて興行した両吟和漢千句を読解する会であった。本年度、共同研究の実施期間に八回の研究会を開き、第一和漢の九三句目から、第二和漢の六二句目までを読み進んだ。

和漢聯句は、中世末期から近世初期にかけてのその盛行に比して未だ研究の光の当たっていない文芸である。当時の一流の作者による代表的な作品に、こうして本格的な注釈を施すことの意義は大きいと考える。ことに、永雄の詩集『倒痾集』や雄長老の名による狂歌、あるいは素然の家集『通勝集』と表現の共通性や差異を見ることに重点を置いた。そしてまた、和漢聯句にあらわれる和漢の知識をどのように考えるべきか、ないしは、和漢聯句という接点を通して和漢の教養が互いに他にどのように影響を及ぼしたかを、具体的事例を前に討論することができた。

近世藩政資料における歌舞伎・浄瑠璃記録の研究

武井協三

『大和守日記』には、若月保治第一回写本、同第二回写本、越後写本の三種が現存している。

この三写本を対照すると、多くの齟齬が発見される。『大和守』原本にはどう書かれていたのか。三写本の各条を比較検討することによって本文を確定せねば、この資料は安易に利用できないのが、研究の現状である。

本共同研究は、この本文確定の研究と作業を行おうとしたものである。四回の正規の共同研究会の他、随時集まって、三写本の対照研究と仮本文の確定を開始した。平行しておこなったのは、三写本と活字本を各条ごとに一覧できる研究用テキストの作成であった。この作業のため三写本は所蔵機関に出向き、新たに鮮明な写真をとった。現在テキストは版下が完成している。

本文の確定は、一部コンピュータへの入力を済ませた。ただ、テキスト作成作業に多くの時間をさかねばならず、これは端緒についたばかりで、今後の課題として残されている。

共同研究のメンバーは、鳥越文蔵（早稲田大学教授）、赤間亮（立命館大学講師）、岩井真実（福岡女学院短期大学講師）、和田修（早稲田大学演劇博物館助手）、武井協三（国文学研究資料館助教授）である。

近世地方出版文化史の研究

本田康雄

研究代表者　朝倉治彦（四日市大学経済学部教授）　共同研究者　今田洋三（近畿大学教養部教授）　長友千代治（京都府立大学教授）

中山尚夫（東洋大学文学部専任講師）　鈴木俊幸（国士館短期大学専任講師）　本田康雄（国文学研究資料館教授）

共同研究実施状況及び成果

近世の文学・文化の研究は人口と出版活動の集中する三都（京、大坂、江戸）を中心に進められてきた。しかし、各藩ごとに学術・文化の発達普及のみられる江戸時代においては地方の出版・文化活動に注目する必要がある。都会中心の研究方法の偏向、地方の資料が未開拓であることなどにより困難な領域であるが、この共同研究においては敢えてその実態について資料に基づき基礎的研究を進めるべく討議を重ねた。研究方法としては、メンバー各自の書肆・出版に関するこれまでの研究成果を発表し討論することを主軸として、文献目録などから書肆・出版に関する研究書・論文を手分けしてリストアップする、また、国文学研究資料館のマイクロ資料中の関連資料を集めて整理する等の作業を行った。

討議の主題としては、一、新出の「伊勢暦」（鈴鹿市立図書館杉野文庫蔵）をめぐって地方出版の問題点（朝倉治彦）、二、近世後期の書肆・貸本屋の活動について（今田洋三、長友千代治）、三、草双紙・滑稽本・人情本と地方の読者との関係（中山尚夫、鈴木俊幸）、四、明治初期の各地の新聞の創刊の状況について、また、新聞小説について（朝倉治彦、本田康雄）であった。

関連する研究発表

朝倉治彦「『伊勢暦』所在調査㈠」（四日市大学論集・第三巻・第二号）　「官刻〝孝義録〟編集過程の一資料」（四日市市史研究第4号）

中山尚夫「十返舎一九年譜稿㈢」（東洋大学・文学論藻第66号）

鈴木俊幸「正月の草双紙売り」（一九九一年度、日本近世文学会春期大会口頭発表）「同」（紀要―中央大学文学部―、文学科第69号）

本田康雄「新聞小説の発生」（一九九一年度、日本近世文学会春期大会口頭発表）「新聞小説と坪内逍遙―読売新聞を読んで」（国文学研究資料館紀要第十八号）

文庫紹介⑯

青森県立図書館

工藤文庫

青森県立図書館に所蔵される「工藤文庫」は、県下の蒐書家故工藤祐司氏が昭和四十二年に寄贈した蔵書に対する名称である。工藤氏は、大正初年から昭和三十八年までのおよそ五十年間に、七戸小・旧制青森高女・旧制八戸水産学校・旧制弘前高女・鷹ヶ岡高校・柴田高校などで教員生活を送り、この間、県内の青森・八戸・弘前の三市を中心に、仙台や東京などの書店からも学術書を精力的に収集した。中には、遠く三重県の古書肆沖森書店から取寄せた和装本なども含まれる。

こうして蒐集した蔵書は一万五千冊に達したが、一時住んでいた弘前市での洪水で約三千冊を流出、残る蔵書のうち複本等を除いた八千七百冊余を、生前に県立図書館に寄贈したのが工藤文庫である。

文庫は近世文学を中心にして、哲学・宗教・歴史・地理・社会科学・芸術・語学など広い分野に跨るが、和古書も多く、当館では昭和五十四・五十五年の二年間に、国文学関係の和装本に限って細目カードで六八二点を、書目カードで一二六点を調査し、その調査に基づいて、そのうちの六七四点を撮影収集した。

収集したものは、当然ながら版本が大部分を占めるが、中に、二点の源氏物語、金葉和歌集などの写本類も点在する。源氏物語のうち一点は、箱入りの列帖装で保存もよく、元禄十一年（一六九八）の古筆了因の極めによれば、一条内基・烏丸光宣等筆の慶長末年頃の書写の田で、本文は青表紙本系統。もう一点も、鈴虫巻と橋姫巻との合綴のため五十三冊だが、五十四巻揃いの完本で、江戸中期頃の書写本。金葉集は、再奏本系の本文で、奥書に享保十九年（一七三四）の書写の旨を記す。この外、版本では、俳諧御傘など、俳書関係書に見るべきものがある。

（所在地）
青森市新町二―四―三〇
青森県立図書館
電話　〇一七七―二二―一一一一

（文献資料部　新藤協三）

新収資料紹介㉝

山本家蔵古筆・古版資料

山本家蔵古筆・古版資料は、山本金蔵（浅草の花屋敷の経営などで知られる事業家。昭和二年没、八〇歳）の旧蔵にかかるもので、現在の所有者山本幸子氏より、この度当館に寄贈されたものである。

当該資料の大部分は、屏風から剝した古筆切・色紙の類であり、山本金蔵の諸事業が順調だった頃、古筆貼交屏風の形で購入されたものかと推測されるが、それ以前から山本家に伝来していたものである可能性も皆無ではない。その他に、屏風とは本来別のものであったと見られる経典の断簡がある（剝落多し）。

山本金蔵の遺品は、その晩年を世話した次男の長谷川如是閑に伝えられた。如是閑は戦災により四万冊の蔵書を失ったといわれるが、古筆切・色紙類はそれ以前に鎌倉の別荘へ移していたため、難を逃れたものと考えられる。屏風は、金蔵没時には未だ屏風の形であったが、その後（昭和二年以降）に屏風から剝されたものと考えられる。屏風から剝されて後当該資料は、如是閑によって、夏目漱石の書簡類等と共に、大事に保存されていたと言われる。

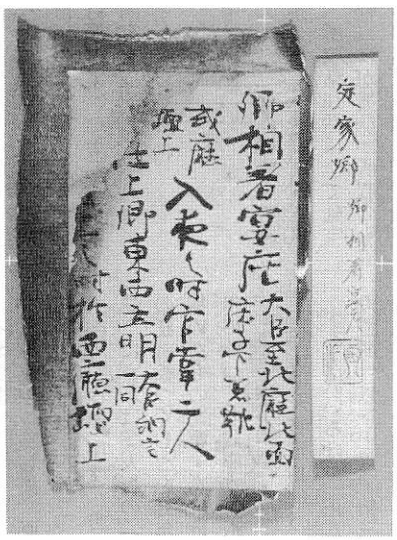
山本幸子氏は、山本金蔵の長男山本松之助（号笑月。朝日新聞記者、文人として著名。昭和一一年没）の養女。如是閑の義妹没後、如是閑の家政に関与した。昭和四四年に如是閑が没した後、その蔵書類は幸子氏の管理するところなり、如是閑に直接関わる蔵書・著作類は、幸子氏の意志によって如是閑の母校中央大学に寄贈された。しかし、当該資料は、右記のように、若干性質を異にするものであったため、その後も山本家に保存されていた。それが、この度、当館に寄贈される運びとなったのは、『長谷川如是閑集』『如是閑文芸選集』（岩波書店）の編集にあたって山本家に親交のある山領健二・神田外語大学教授の仲介によるものである。

資料の概要は次の通り、計二六点。和歌が多いが、連歌・漢詩・経典等、多彩であり、うち十五点程に古筆家による極札が付されている。補修の上、折本等の形に仕立てて閲覧の便を図る予定である。

極札	冒頭など	松永貞徳
藤原清輔朝臣	きたへゆく	（持明）院基輔卿 極ナシ
寂蓮法師	夫弘誓の舩に	極ナシ
慈鎮和尚	あかすとや	極ナシ
定家卿	卿相着宴座	極ナシ
寧一山国師	難鋳此	極ナシ
為相卿	みわたせば	極ナシ
世尊寺殿行尹卿	暁諧於論事	極ナシ
極ナシ	はるやとき	
（「為定卿」の極があるが、本文と一致）		極ナシ
四辻殿	みよしの、	極ナシ
甘露寺親長卿	とよみてたて	
徹書記門人正般	わか宿と	極ナシ
連哥師宗梅	山川の	
言継卿	なまじる	
飛鳥井雅章卿	早春霞　廿首	

日冬之朝
あはれをけふの
萬里路長　梅庵
一字露顕　第七
おほし侍き
めかれせぬ程もふけ行
いたつらに（色紙）
世中はうきみにそへる
弘空解脱門不作
（経切）
壬一心合掌嘆
（経切）
拘翼深入学者
（経切）
労文殊師利成仏
（経切）

（整理閲覧部・佐伯眞一）



新収和古書抄　平成三年

愚管抄　写七巻三冊

漢字平仮名交り、一面十行。奥書「宝暦十年庚辰十一月廿二日／伴宿禰浚明」。山岡浚明筆写本であることを示す奥書で、書陵部蔵の所謂天明本の原型を伝えるとも見られるが、旧教育大蔵七冊本にも全く同じ奥書があり、浚明自筆とは断定できない。なお東大蔵天保写本もこの系統の写し。該本はこれらとの兄弟関係か。

武徳鎌倉旧記板木　一枚

享保三年刊の八文字屋本『武徳鎌倉旧記』の板木。巻十二の第二・三丁を、一枚の板木の両面に彫ってある。虫損が激しいが、挿絵の部分はきれいに残っている。浮世草子の板木が伝存すること、極めて稀である。

歌仙抄

写本、袋綴一冊。下河辺長流著。三十六歌仙の各一首に注釈を施すもので、若干所収歌の異なる季吟の歌仙拾穂抄と双璧をなす。寛文六年の刊記をも書写する版本からの写し。

浅井家伝来能装束附

大坂の観世流職分浅井織之丞家伝来の能楽伝書で、十五世観世大夫元章の刊行した明和本に特有の曲を含む80曲の装束付。元章の弟子だった浅井織之丞章盈の伝書と信じ得る。「鴻山文庫」印有り。

御役者伝授金調

嘉永から万延年間にかけて、某大名家で出入りの喜多六平太ほか狂言や囃子方も含む能役者の入門料や習い事伝受の免状料などについて記したもの。鴻山文庫旧蔵。

能評判

元禄二年刊。四巻一冊。京在住の能役者や江戸四座の主要な役者の評判記。『徳川文芸類聚一二』や雑誌『能楽』一巻三号～七号に翻刻があるが、巻三は未紹介。本書は笹野堅旧蔵、鴻山文庫本。

元禄十一年分限帳之控

元禄十一年の江戸四座に属するほとんどすべての能役者の姓名・禄高・役名・父親名・師匠名・住所・年齢等の書上。明和五年に観世座地謡の日吉太兵衛が同書を福王家へ差し遣わした際の控。

本願寺関係御能組資料

江戸期の能番組や謡初の次第など本願寺の能楽関係資料一括33点。

賦何船連歌　一冊

横本、写本。長享二年の宗祇宗匠始連歌百韻のほか、天正～寛永期の連歌百韻の集。全十巻。表紙に各巻の内容を摘記して「連聚／千句／孤」と記している。

軽口咄　中巻一冊

咄本。大本。三巻本の巻中のみ存。柱「かるロ」。15行、師宣風挿絵6図。所収話16話は全て延宝七年刊「軽口にが笑ひ」所収のもの。上方本の話を抜出し、挿絵を付した江戸版。

紙魚のなごり　欠一冊

零葉集。全五十葉。全五冊のうちの第五輯。昭和三十一年から四十四年まで続いた和本研究会の編。古書肆の関与した典型的な稀本零葉集の一つで、本集には、巻頭に『太平記』（慶長十二年古活字版）、巻末に『浮世画譜』を貼付する。

書史志料　一冊

零葉集。全二十種二十一葉。題簽および見返し貼付の書付により、書田会の初会（明治四十二年三月三日、於濱真砂宅）頒布分を整理・編集したものと推定。限定十部。各種版本の零葉に加え、奈良絵本一葉、外題簽二種を貼る。水落露石旧蔵本。

国花繁栄集　五巻五冊

歌舞伎絵づくし集。原題簽「国花繁栄集　一（～五）」。表紙薄様。天明五年序。序文（書肆問月堂誌）によれば、大坂の「角の芝居の狂言絵づくし」を五年このかた集めたもの。第一巻には安永九子年の絵づくし（座本芳沢いろは）「千集萬歳千箱贈」以下八点、第二巻には天明元丑年の絵づくし（座本芳沢いろは）「正八幡再来祐殿勝関」以下十点、第三巻には天明二年寅年の絵づくし（座本藤川山吾）「天赦萬義経鼎扉」以下十二点、第四巻には天明三卯年の絵づくし（座本藤川山吾）「倭文字三才図会」以下十二点、第五巻には天明四辰年の絵づくし（座本藤川菊松）「蓬莱山改顔見世」以下十二点を収録している。

大坂芝居番附・大坂芝居絵番附

大坂の歌舞伎の、役割番付（約一九〇点）、絵尽し（約一三〇点）を集成。役割番付は、天保期と嘉永・安政期の、中の芝居・角の芝居のものが大半であるが、化政期のものや宮地芝居のものも数点含まれる。絵尽しは、文化中期から弘化・嘉永期にかけての道頓堀各座のもの。役割番付の紙背資料として、見立番付・摺物の類が多数あり、これも興味深い。

彙報

委員会日誌

平成3年
11月8日　国際日本文学研究集会委員会（第三回）
11月19日　国文学文献資料調査員会議（中国・四国地区）
11月22日　国文学文献資料調査員会議（中部地区）
12月4日　共同研究委員会（第二回）
12月26日　国際日本文学研究集会委員会（第四回）
平成4年
1月30日　国文学文献資料収集計画委員会（第二回）
2月7日　共同研究委員会（第三回）
2月18日　情報処理システム運用委員会（第一回）
2月20日　大学院教育協力委員会（第二回）
3月16日　古典籍総合目録委員会（第一回）

評議員会の開催について

本年度第二回評議員会が平成四年三月十九日（木）に開催され、議事は、管理運営の概況並びに平成四年度予算内示及び科学研究費補助金並びに平成四年度事業計画について評議が行われた。

運営協議員会の開催について

本年度第二回運営協議員会が平成四年一月十日（金）に開催され、議事は、教官人事について協議が行われた。

本年度第三回運営協議員会が平成四年二月二十四日（月）に開催され、議事は、教官人事並びに管理運営の概況並びに平成四年予算内示及び科学研究費補助金並びに平成四年事業計画について協議が行われた。

海外研修旅行

原　正一郎
渡航先　アメリカ合衆国
目　的　国際IEEE医用電子工学会議出席発表及び発表内容に関する文献調査・研究討論のため
期　間　平成3年10月31日～平成3年11月8日

人事異動（平成3年10月～3月）

○平成3年10月1日付
（併　任）
関根賢司（文献資料部助教授）
（琉球大学教授から）
（平成3年10月1日～平成4年3月31日）

訂　正

37号の記事に誤りがありましたので、おわびして訂正させて頂きます。

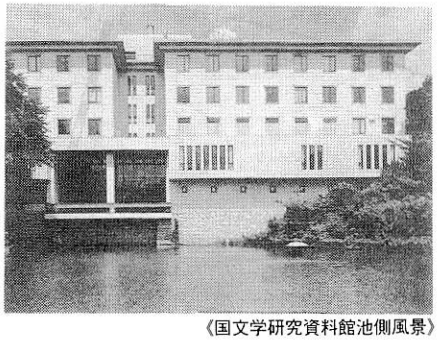
12頁3段22行目
辻　勝　美　日本大学文理学部講師
14頁1段20・21行目
期　間　平成3年9月11日～平成3年9月25日
14頁3段7・8行目
鈴木　淳（文献資料部助教授）
（国学院大学助教授から）
14頁4段11～13行目
（転入）
松岡憲雄（庶務課長）
（長岡技術科学大学から）
（転出）
井上憲雄（庶務課長）
（岐阜大学へ）
16頁表題
平成三年度秋季学会一覧

共同研究員

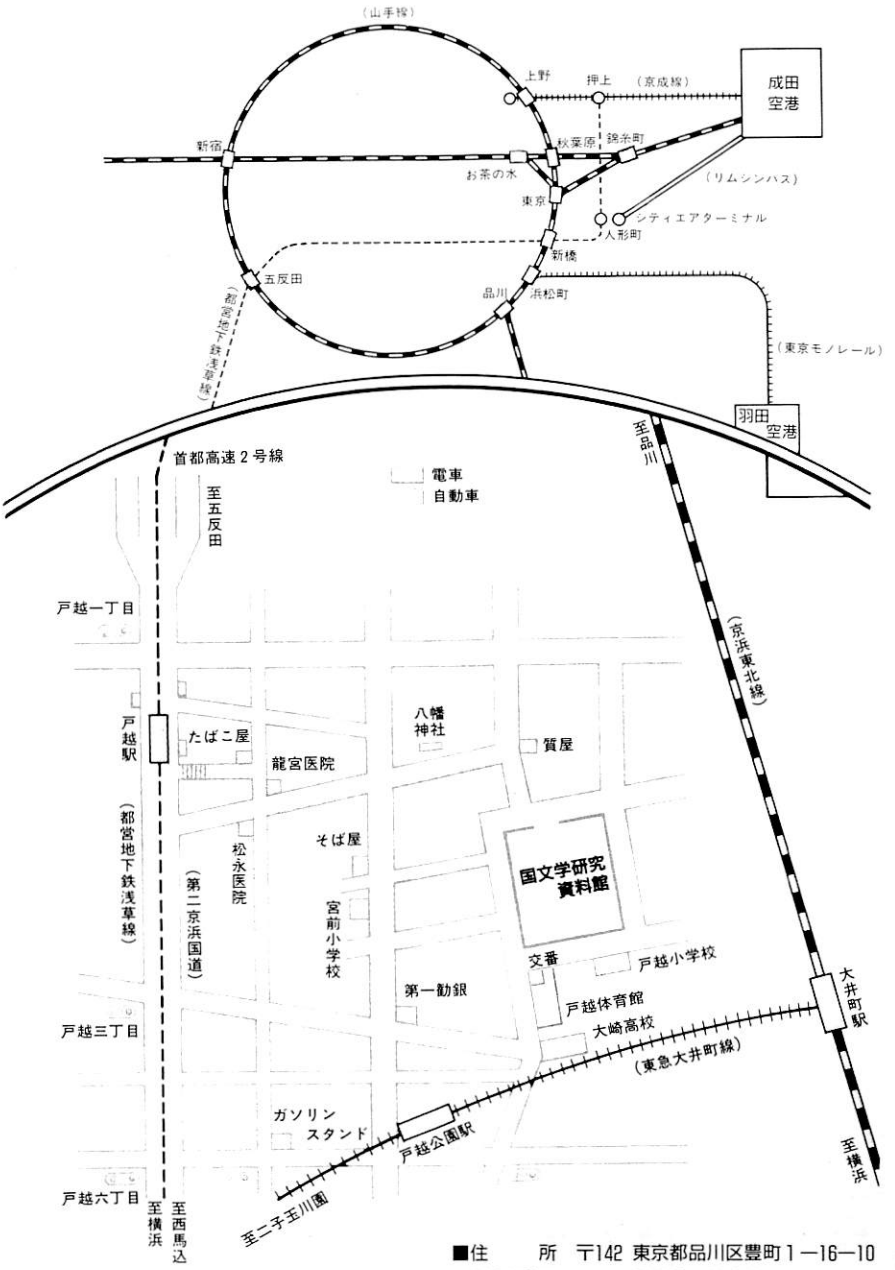
任期　平成3年11月5日～平成4年5月4日

課題名「日本文学の特質――明治後期の随筆文学の研究」

ジャン・ジャック・オリガス　国文学研究資料館客員教授
大岡　信　東京芸術大学教授
紅野敏郎　早稲田大学教授
高橋英夫　評論家
十川信介　学習院大学教授
中島国彦　早稲田大学教授
野山嘉正　東京大学教授
芳賀　徹　国際日本文化研究センター教授
平岡敏夫　筑波大学教授


《国文学研究資料館池側風景》

案内図



■住　　所　〒142 東京都品川区豊町1—16—10
■電話番号　03—785—7131
■FAX番号　03—785—7051

利用者へのお知らせ

ービス係におたずねください。

◆資料複写料金徴収猶予の取扱いの実施について

これまで当館で申込受付した資料複写の料金の徴収については、一律に前納の取扱いがなされてきました。

このたび文部省令の一部改正により、大学共同利用機関における複写料金の徴収猶予について「国立大学附属図書館における文献複写料金徴収猶予取扱要領」を準用することになりました。

当館では、平成四年度から、国立大学附属図書館と同様に、公私立大学等の図書館から申込受付した資料複写料金の徴収猶予取扱を実施することになりましたので、お知らせします。

徴収猶予の対象となる機関は、①公私立の大学図書館・短期大学図書館・高等専門学校図書館並びに学校図書館法（第二条）に規定する図書館、②図書館法（第二条第一項）に規定する図書館、となっています。

なお、この徴収猶予の取扱いを希望される場合は、手続が必要です。詳細については、当館情報サ

◆所蔵目録刊行のご案内

このたび『マイクロ資料目録』『逐次刊行物目録』の最新版が刊行されましたのでご案内いたします。

(1)『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九九一年』（第15冊）

この目録には、二四所蔵者（文庫）分、六、二六四点が収録されています。そのうち一〇所蔵者（文庫）が、今回新たに収録されるものです。

収録所蔵者（文庫）は、次のとおりです（＊印は新規収録分）。

文庫No	所蔵者
30	刈谷市立刈谷図書館（村上文庫）
33	東洋文庫
49	岩国徴古館
55	陽明文庫
88	東京芸術大学附属図書館
99	高知県立図書館（山内文庫）
224	熊本大学附属図書館（北岡文庫）
225	University of California, Berkeley
238	法政大学能楽研究所（鴻山文庫）
252	秋田県立秋田図書館（時雨庵文庫）
257	大和文華館
276	加賀市立図書館（聖藩文庫）
277	園部町教育委員会（小出文庫）
292	＊戸隠宿坊群（二澤久昭）
293	＊戸隠宿坊群（久山勝彦）
294	＊戸隠宿坊群（大西正一）
295	＊戸隠宿坊群（武井芳久）
299	＊中京大学図書館
305	＊愛知県立大学附属図書館
シ4	＊浄照坊
シ5	＊寿岳章子
ス3	＊住吉大社
ト5	＊藤園堂文庫
ヤ8	矢口米三（矢口丹波記念文庫）

(2)『国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録一九九二年』

収録誌数は、前年分より七四誌増え、三、五三一タイトルで、本年一月末までの受入れ分が収録されています。

◆マイクロ資料目録の市販について

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九九〇年（縮刷版）』（第14冊）が笠間書院より刊行され市販されています（定価六、六九五円）。既刊十三冊とあわせて御利用ください。

◆週休二日制について

すでに新聞等で報道されておりますように、政府は本年五月から国家公務員の完全週休二日制を実施する予定です。

これまで当館では、土曜日においても、職員の交替制勤務によって、平日同様の閲覧時間の維持に努めて参りましたが、今回の完全週休二日制の実施に伴い、五月二日(土)から土曜日を閉館とする予定です。

なお、この措置に関連して、五月からは、平日の開館時間を次のように延長することとしております。

現在	午前九時三〇分～午後四時三〇分
変更後	午前九時～午後五時

平成四年度春季学会開催一覧

①事務局　②学会開催日　③会場

解釈学会　①〒101 千代田区神田神保町2-46 教育出版センター内03-3239-5438

歌舞伎学会　①〒169 新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218　②5月17日　③ラフォーレミュージアム原宿

訓点語学会　①〒192-03 八王子市東中野742-1 中央大学文学部国文学研究室内0426-74-3789　②5月22日　③筑波大学

芸能史研究会　①〒606 京都市左京区浄土寺真如町77　075-761-8718　②6月7日　③京都御車会館

計量国語学会　①〒167 杉並区善福寺2丁目 東京女子大学3号館118号室03-3395-1211内339

国語学会　①〒101 千代田区神田錦町3-11武蔵野書院気付 国語学会事務室03-3291-4850　②5月23、24日　③筑波大学

古事記学会　①〒150 渋谷区東4-10-28 国学院大学文学部第2研究室03-5466-0215　②6月20、21日　③武蔵野女子大学

上代文学会　①〒175 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学文学部日本文学科304研究室内03-3935-1111(内)304　②5月16、17、18日　③山口大学

昭和文学会　①〒101 千代田区猿楽町2-2-5 笠間書院内03-3295-1331　②6月6日　③大正大学

説話・伝承学会　①〒603 京都市北区小山上総町 大谷大学内075-432-3131　②4月28、29日　③大谷大学

説話文学会　①〒168 杉並区永福1-9-1 明治大学和泉校舎法学部林雅彦研究室内03-3322-3151　②9月21日　③国文学研究資料館

全国大学国語教育学会　①〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学言語系教育研究室内0795-44-1101　②8月6、7日　③東京茗渓会館

全国大学国語国文学会　①〒101 千代田区猿楽町1-3-1 桜楓社気付03-3295-8774　②6月6、7日　③立正大学

中古文学会　①〒102 千代田区三番町6 二松学舎大学文学部国文学科研究室内03-3261-7406内260　②5月16、17日　③二松学舎大学

中世文学会　①〒192-03 八王子市東中野742-1 中央大学文学部国文学科研究室0426-74-3789　②5月30、31日、6月1日　③中央大学(多摩校舎)

日本演劇学会　①〒169 新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218　②5月23日　③玉川大学文学部

日本音声学会　①〒110 台東区東上野3-25-6 蒼洋社ビル5F03-3839-3957

日本歌謡学会　①〒630 奈良市高畑町 奈良教育大学真鍋研究室内0742-27-9153　②5月16、17日　③帝京大学

日本近世文学会　①〒184 小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学国語教育学科古典第6研究室内0423-25-2111内2311　②6月6、7日　③上智大学

日本近代文学会　①〒156 世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部国文学科研究室内03-3329-1151　②5月23、24日　③日本大学商学部校舎

日本口承文芸学会　①〒112 文京区白山5-28-20 東洋大学東洋学研究室内03-3945-7224　②6月6、7日　③東洋大学白山校舎

日本語教育学会　①〒107 港区赤坂1-8-10 第9興和ビル内03-3584-4872　②5月30、31日　③東京外国語大学

日本国語教育学会　①〒112 文京区大塚3-29-1 日本教育研究連合会内03-3941-3420　②8月8、9日　③8月8日 筑波大学附属小学校 8月9日 国立教育会館虎ノ門ホール

日本社会文学会　①〒102 千代田区富士見2-17-1 法政大学文学部西田勝研究室内03-3264-9751　②6月6、7、8日　③法政大学

日本比較文学会　①〒573 大阪府枚方市北片鉾町16-1 関西外国語大学阪上善政研究室内0720-56-1721　②6月20、21日　③東北大学文学部

日本文学協会　①〒170 豊島区南大塚2-17-10 03-3941-2740　②6月21日　③駒沢大学

日本文学風土学会　①〒214 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部国文学科内044-911-1036　②5月30、31日　③専修大学

日本文芸研究会　①〒980 仙台市川内 東北大学文学部内022-222-1800　②6月6、7日　③東北大学文学部

日本文体論学会　①〒110 台東区下谷1-5-34 三修社内03-3842-1711　②6月19、20日　③杏林大学

日本方言研究会　①〒115 北区西ケ丘3-9-14 国立国語研究所気付日本方言研究会幹事03-3900-3111　②5月22日　③筑波大学

俳文学会　①〒663 西宮市戸崎町1-13 武庫川女子大学第三学舎島津忠夫研究室内0798-67-0079

表現学会　①〒730 広島市中区東千田町1-89 広島大学総合科学部082-241-1221　②6月6、7日　③筑波大学

万葉学会　①〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学文学部国語国文学研究室内06-605-2413～4　②10月3、4、5日　③高岡市萬葉歴史館

美夫君志会　①〒466 名古屋市昭和区八事本町101-2 中京大学文学部国文学研究室内052-832-2151　②7月25、26日　③中京大学

和歌文学会　①〒108 港区三田2-15-45 慶応義塾大学文学部国文学研究室内03-3453-4511

和漢比較文学会　①〒468 名古屋市天白区高宮町1302 名古屋女子大学文学部日本文学科野崎研究室内052-801-1133

国文学研究資料館報　第三十八号
平成四年三月発行
編集・発行者　国文学研究資料館
東京都品川区豊町一-一六-一〇
郵便番号一四二
電話(三七八五)七一三一(代)
印刷所　株式会社　三興